

# 愛知県ハンガリー友好協会会報

2014年3月号

「V4+日本」交流年事業

## 《ハンガリー刺繍サークル作品展のご案内》

「ベーケーシュの刺繍」

早稲田 みか (大阪大学教授)

ハンガリー刺繍サークル作品展が開催されます。

日時：2014年3月28日(金)～4月2日(水)

場所：ギャラリーチカシン 地下鉄栄 森の地下街 北二番街 (地下鉄東山線栄駅 東改札口の北)

開館時間：10:00～18:00 (ただし、最終日2日(水)は14:00まで)

入場無料

愛知県ハンガリー友好協会、ハンガリー刺繍サークルの作品展は今回で二回目になります。前回はカロチャ刺繍を中心に作品を展示しました。今回のテーマはベーケーシュ県の刺繍です。ベーケーシュ県はハンガリーに19ある県のひとつで、ハンガリーの南東に位置します。

ハンガリーの刺繍は、地方によって色やパターンがさまざまに異なります。それぞれの刺繍がどのようにして発達し、形成されてきたのかも、それぞれに独自の歴史的背景があります。

日本ではハンガリーの刺繍として広く知られているカラフルなカロチャの刺繍は、家具などに描かれていたパターンが部屋の壁に描かれるようになり、布にも刺繍されるようになって形成されたものです。

それに対して、ベーケーシュ県の刺繍は、もともとは皮のコートに刺繍されていたパターンに由来します。ウエストが絞ってあり、丈の短い羊の毛皮コートは、ハンガリー語で **ködmön** と呼ばれていますが、この単語は古代チュルク語にさかのぼる借用語で、非常に起源の古いものです。ハンガリー人たちが現在の地に定住する以前から、こうした羊の皮のコートを着用していたことがわかっています。

ベーケーシュの刺繍は、こうした皮職人の手によって刺されていたもので、男性の仕事でした。女性たちが、その装飾パターンを応用して、布にさすようになったものが、ベーケーシュの刺繍です。



色はカロチャほどカラフルではありませんが、緑、黄色、紫などを中心としたシックな色調で、独特の雰囲気があります。カロチャ刺繍とはひと味ちがうベーケーシュの刺繍をぜひご覧下さい。

作品展ではベーケーシュの刺繍だけでなく、ハンガリー全土の刺繍も展示し、紹介します。みなさまの来場を心よりお待ちしております。

## 《 ハンガリーフェスティバル in 愛知 》

恒例のハンガリーフェスティバルの内容が下記のように決まりました。

### “ かわいい絵本の世界とクラリネットの調べ ”

日程：2014年6月8日(日)13：30～16：30

会場：名古屋国際センターホール

会費：一般 1,500 円 会員 1,000 円 中学生以下無料

内容：13：30～14：00 クラリネットの調べ

曲目：バルトーク／ルーマニア民族舞曲・3つのチーク地方の民謡

コーカイ / 4つのハンガリー舞曲

ヴェイネル／ペレギ・ヴェルヴンク

ヒダシュ / ファンタジー

演奏：コハーン・イシュトヴァーン(クラリネット)・高橋ドレミ(ピアノ)

14：00～15：00 講演：ハンガリーの児童文学について・絵本読み聞かせ

講師：マレーク・ベロニカ(ハンガリーの絵本作家)

カールマン・アンドレア(ハンガリー大使館文化担当官)

15：15～16：30 みんなで交流しましょう!

ハンガリーサラミ+パン、ハンガリーのお菓子、ハンガリーワインなど

展示：ハンガリー刺繍サークルの作品展

ハンガリーの子供たちの絵画展

(ヴァーツィ・ミハイ小学校・レメーニク・シャールドル小学校)

## 《 名古屋 MID FM 761 に出演 》

理事の寺西むつみ先生にお誘いいただき

2月18日(火)20：00～21：00 MID FM

「むつみの Super Tuesday」に役員6人が出演しました。協会の紹介やハンガリー刺繍サークル作品展の宣伝をさせていただきました。詳細な打ち合わせなく、ほとんどアドリブの会話、むつみ先生のテンポの速いリズムに、とても楽しいトークでした。次回は5月27日に出演予定です。

この番組は WEB でも聞くことができます

ため、遠くの方、海外でも聞くことができます。ハンガリーの皆さんも聞いて下さいね。



## 《 ワグナー・ナンドール 》

小松 裕文 (ハンガリー在住)

ゲレルトの丘はブダペスト随一の観光スポット。ペスト側からは丘の上に建つ銅像がよく見える。ツィッタ・デラや夜景を目当てに多くの観光客が訪れる。この丘の一部に素晴らしい公園「哲学の庭」がある。ドナウ河を眼下に見渡せ、「ドナウの首飾り」チェーン・ブリッジを目前にできる場所である。残念ながらここはガイドブックには掲載されていないし、多くの日本語ガイドもその存在を知らない。

「哲学の庭」はハンガリー生まれの日本人ワグナー・ナンドール 日本名 和久奈 南都留が作った8体のブロンズ像が並ぶ公園である。2001年10月に、ハンガリーや日本の政財界の要人約1000人がその完成を祝った。

彫刻群は二つのグループで構成されている。第一のグループは世界の大きな宗教の祖となった人達＝「老子」「キリスト」「釈迦」「アブラハム」「エクナトン」が広場の中心の池の周囲を囲んでいる。第二のグループは悟りの境地に達し、それを社会で実践した人たちのグループ＝「達磨大師」「聖フランシス」「ガンジー」＝がドナウ川に向かって一列に並んで建てられている。

作品には「相互理解のために」というサブタイトルが付けられているように文化、宗教、思想、人種の壁を越えて人々が互いの理解と発展を願う思いが込められている。

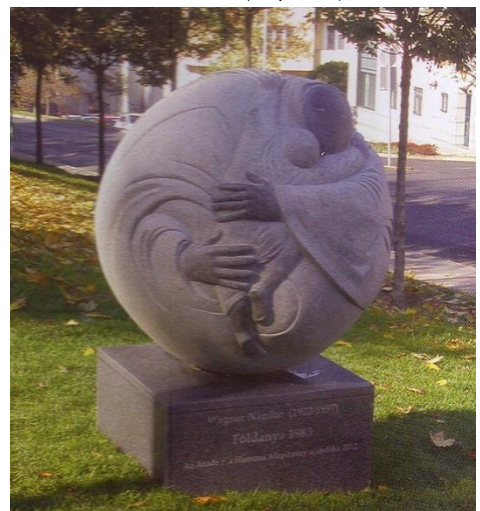
「哲学の庭」は東京都中野区哲学堂公園、栃木県益子町ワグナー・ナンドールアートギャラリーにもある。上記二つのグループに第三のグループ＝現存する法律の源流を作った人物＝聖徳太子、ユスチニアヌス帝、ハンムラビ王を加えた11体の像で構成されている。

作者のワグナー・ナンドールは1922年ハンガリーのトランシルバニア地方ナジヴァラード市(現ルーマニア領オラディア市)生まれ。高校で建築学、国立美術大学で彫刻専攻。他に解剖学、考古学、民族学などを習得。1951年ハンガリーのスターリン時代、公職から追放され、以後彫刻家としての活動を始める。1956年のハンガリー動乱の際は知識人代表に選ばれ、当時の政府から危険人物として弾圧を受ける。これをきっかけにスウェーデンに亡命。この時代の作品は友人によりセーケシュフェヘルヴァールの国立博物館に隠された。1966年にはスウェーデンで知り合った秋山ちよと結婚。1969年日本に移住。1975年日本に帰化。1997年75歳で永眠。

ブダペストには彼の作品はもう一点ある。王宮への北側の出入り口、ウイーン門の手前にある「母子像」である。札幌円山公園にあるのと同じ作品で円球の中で抱き合っている母と子は母子の絆を強く印象づける作品である。



哲学の庭



母子像 ウイーン門前



ハンガリアン・コープス

「ハンガリアン・コープス」はナンドールの代表作。高さ約2.5メートルのブロンズ像はセーケシュフェヘルヴァールのヤーヴォル・オットー広場に展示されている。ハンガリー人の希望と訳され、キリストが磔刑にされた姿をイメージしたもの。絶望感に打ちひしがれた姿だが大きく開いた左手の人差し指だけが力強く天を指差している。「どんなに困難な状況でも光明を見出す姿勢を左手に託した」とナンドールの妻ちよさんは語ってくれた。



新発見の母子像

2013年9月22日から10月17日までセーケシュフェヘルヴァールの国立博物館でワグナー・ナンドール展が開かれた。同博物館の壁の奥から新たに大小40点の作品が見つかり、それを展示したもの。ハンガリー動乱の後、スウェーデンに亡命した時、作品は友人によって博物館内に秘密裏に隠されたものが57年振りに日の目を見た作品である。ワグナー・ナンドールの作品はワグナー・ナンドールアートギャラリー 〒321-4217 栃木県芳賀郡益子町益子 4338 Tel0285-72-9866 <http://wagnernandor.com> まで。また彼の生涯は「ドナウの叫び」下村徹著、幻冬社をお読み頂ければ幸いである。

## 《 ニーデルハウゼルの思い出 》

三苫 民雄 (愛知産業大学短期大学教授)

私はかつて1987年から1990年までの3年間をハンガリー政府給費留学生として、首都ブダペストで過ごしました。

この留学期間中に指導教授としてお世話になった先生の一人がニーデルハウゼン先生でした。

ニーデルハウゼン先生が指導教授を引き受けてくださったのは、もともと留学前に師事しようと考えていたリトヴァーン先生が「自分は政権に好かれていないから」とのことで気を利かせていただいて、ハンガリーアカデミー歴史学研究所で同僚のニーデルハウゼン先生の名前を借りて、ハンガリー政府給費留学のための推薦状を作ってくださいだったのできっかけでした。

ニーデルハウゼン先生は、英仏独語はもとより、東欧ロシア18カ国語を操る語学の達人で、当時すでに東欧ロシア史の分野では世界的な大家でした。しかし、並外れた研究者でありながら、少しも偉ぶったところがない、たいへん気さくなお人柄で、私も公私共に大変お世話になりました。

当時私はハンガリー語で学位論文を書いていたこともあって、毎週執筆の進捗状況を報告に研究所を訪れていましたが、原稿を持って行くと丁寧にハンガリー語のネイティブチェック

までしていただきました。

それにしても、ハンガリーアカデミーの正会員にチューターのようなことまでさせてしまったのは本当に恐縮ですが、私が留学中に論文をまとめることができたのは言うまでもなく先生の献身的なご指導のお陰です。

先生は日本にも講演に来られたことがあり、日本人研究者との交流も多く、そのため、ハンガリー留学中にお世話になった研究者は私以外にも 10 人を下りません。

その内の 11 人の研究者が集まって先生の 1995 年に出た著書『東欧史学史』を翻訳したものが今年北海道大学出版会から無事出版されました。これが『総覧 東欧ロシア史学史』（北海道大学出版会 2013 年）です。

2005 年に東欧ロシア史学史研究会を結成したメンバーを中心に、東欧諸地域の専門家の協力も仰ぎつつ、年 2 回の会合を繰り返しながら翻訳を進め、このたびようやく完成にこぎつけました。

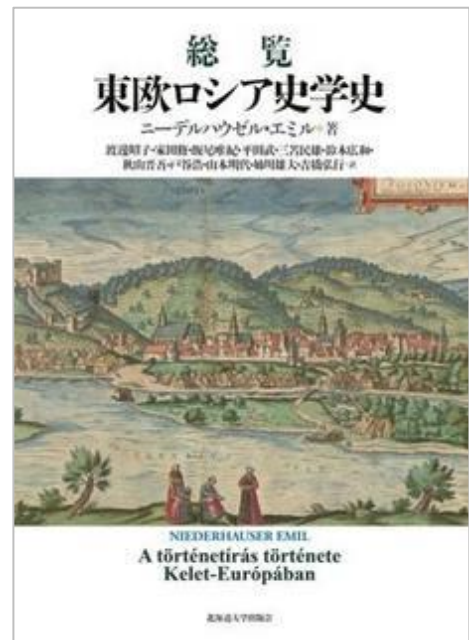
ニーデルハウゼン先生は 2010 年に病床で本書の見本版を目にしてから他界されました。享年 86 歳でした。本書の刊行を大変お喜びだったとのことで、何よりでした。

本書は東欧ロシア地域において、歴史学がどのように記述されてきたかを扱う専門的な歴史書ですが、同時に各国の歴史研究者にとって基礎的文献となるべき労作です。

ここで扱われている文献情報も 1 万件近くになりますが、今後の各地域の研究者の協力により、いっそう充実した文献情報データベースの役割をも果たすものになることが期待されています。

私の研究分野はハンガリーの法・社会思想史ですが、歴史ということに関しては歴史家の端くれとも呼べないほどの存在です。それでもニーデルハウゼン先生のような素晴らしい歴史家に個人的に接することができたのは、幸運な偶然としか言いようがありません。

そして何よりも、このとき目の当たりにした先生の学問に対する真摯な姿勢と情熱は、今も私の心のなかにもしっかりと刻印されています。先生を研究者の鑑として今後一層精進していきたいと思います。（愛知産業大学通信教育部定期刊行誌「PAL」2014 年 1-3 月号より転載）



## 《 瀬戸国際セラミック&ガラスアート交流プログラム



バボシュ・パールマさん

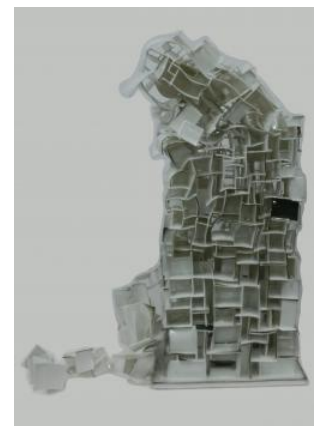
### 2013—2014 招聘作家作品展》

会場：瀬戸市美術館

日程：2014 年 2 月 1 日(土) ～ 3 月 23 日(日)

クリスマス会にいらして下さったハンガリーの陶芸家バボシュ・パールマさんの作品も展示。

2013 年 11 月 1 日～12 月 20 日まで瀬戸市に滞在して制作された作品です。是非お出かけ下さい。



バボシュさんの作品